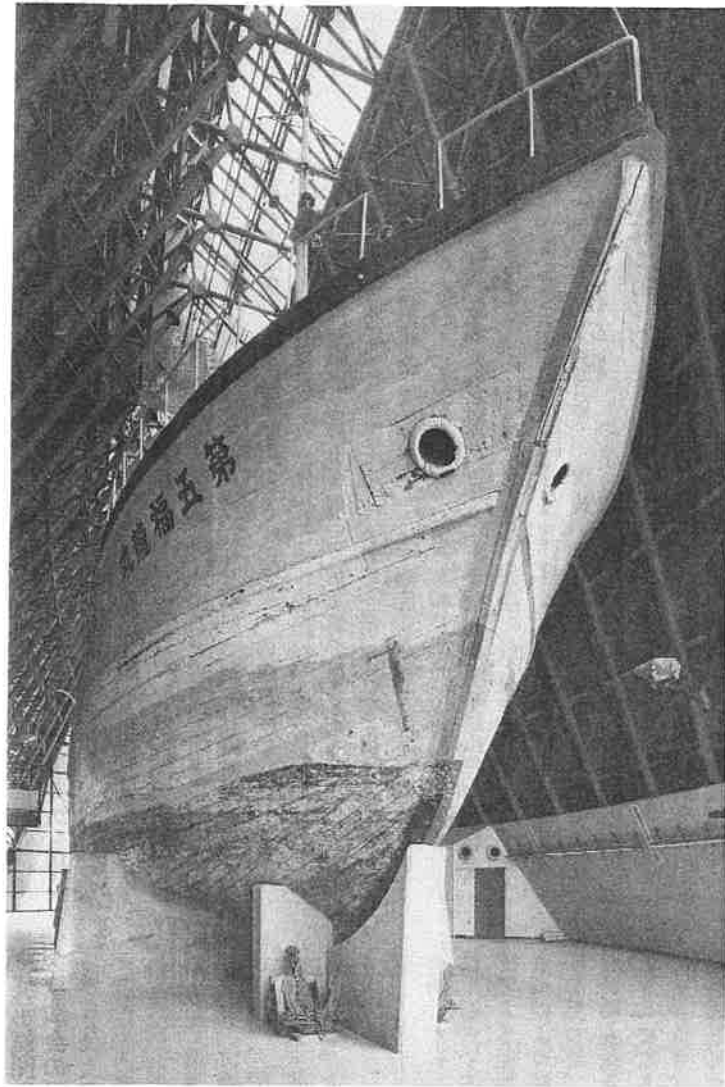


福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース

(財) 第五福竜丸平和協会
 〒136 東京都江東区夢の島3-2
 都立・第五福竜丸展示館内
 電話 (521) 8494



竣工 (撮影・三沢博昭)

「第五福竜丸修復工事を終えて、いよいよ工事も終盤に入り、仮囲塀を撤去し始めたところ、無性に淋しさが過ぎ、一年有餘に亘り手塩にかけた福竜丸との別れに感傷的になる。長年幾多の工事に携わったが、この様な離れ難い気持ちを味わった工事は初めてである。今にも崩れ落ちそうな船体、

何処から手を付けてよいか解らない朽ちた船内。特命の榮に浴し、東京都及び文化財建造物保存技術協会の熱意と第五福竜丸平和協会の方々の愛情に支えられ、予定通り修復工事は完了した。ひ弱な姿は今は無く、逞しく蘇った福竜丸が颯爽と海上に滑り出す錯覚さえ覚える。元気でいてくれと限無く

いとおいしい。工事中、何十何百人もの児童が見学に来る。この清らかな瞳に映る船から学んだ平和の願いを忘れず、日本の未来を守って欲しいと念ずにはおられない。明日もまた新しい瞳の前に第五福竜丸は堂々と平和を呼びかけてくれるに違いない。

株式会社 落合組 落合 巖

来館者の声から

足立ろう学校寄宿舎代表できました。一年間、原爆、水爆のこわさを知り、平和を願い、千羽鶴を折りました。その鶴を持って、見学にきました。これからも、平和が続くように願っています。

足立区から荒川土手を下って東京湾にきました。第五福竜丸が展示されているのを教科書で見ました。写真では、どのくらい大きな原爆のひどさはわかりませんでした。しかし、見ておどろいたのは船がそのままになっている。直されたところもあるみたいだけ

公園に新しい案内板

夢の島公園に春のそよ風。ユーカーリの繁みの間から銀葉アカシアの黄色の花がすすみのように一面にひろがる。そんな中、公園の入口七カ所に新しく立派な「都立夢の島公園案内図」が建てられた。カラフルな案内板の中央に大きく第五福竜丸が浮んで見え、カモメが一羽ふわりと飛ぶ。「やあ、船だ。いって見ようぜ」。元気な子どもたちの歓声が、展示館に春をよんで来る。

ましたが、いろいろと勉強になりました。この建物の存在が薄いの、宣伝すべきだと思います。もっと多くの小中学生に観てもらいたい。

れども、こういうものは戦争をしらないこれからの子どもたちに見てもらって、戦争というものは、こわいものだと思ってもらうように一生のこしてほしいと思う。少ないけれど、ぼくも募金しました。それにしても、ちょっとざんねんなのは、船の中が見れないことでした。

このことはいつまでも忘れない。そして、このようなことが二度とおこらぬように、世界中の人々全員で、核兵器廃絶を訴えよう！

わたしはこのころにうまれていなかったもので、どれほどおそろしいことか、わかりました。このようなものをのこしていてくれてどうもありがとうございます。

編集後記

▼落合巖さんの文面は、落合組の福竜丸に対する思いが並々ならぬものであることを感じさせられる。あつという間に過ぎてしまったような一年二カ月。「自分たちも社長と同じ気持ちです」！仮囲塀をはずした時、落合組のだけれども、淋しさを感じたという。三月十四日、竣工▼「今年も、三月一日にビキニ・デーの学習を行ない、保戸島小学校の子ども達の平和を願う気持ちは大きくなっています」！春風に乗って今年も大分県保戸島より、「まっ白ぶねくん」へ子どもたちからの手紙が届けられてきた。大田区矢口中学校の見学後の感想文と共に次号で紹介したい▼雪柳、れんぎょう、土筆、四月の夢の島は、穏やかな光景が広がります(は)。

●100万人参観者運動を！

86年3月来館者数	7,117名
通算1カ月平均来館者数	5,356名
当月1日平均来館者数	274名
通算来館者数	632,064名



新しい船出を祝うように

「次は資料室・事務所の建設」と意欲

修復なった第五福竜丸の船出を祝うかのような三月の展示館。時ならぬ春の大雪の日も春風のそよぐ日も小学生の社会科見学が続く。

船大工さんテレビに

「いい仕事できてうれしい。誇らしい気持ちです」—短い言葉が長い苦労をしのばせた。三月十七日NHKテレビの朝のニュースに船の修理にあたった船大工の横川広さんが登場。全国に船体修復無事完了を伝えた。テレビを見てかけ

つめたという地元の人も多い。また、三月二十五日「アメリカ核実験再開」、船も怒っていますね」とソ連の週刊紙ニュータイムズの記者が来館。船をビデオにおさめモスクワに送り近日放送とか。

三月六日、第五福竜丸乗組員・高木兼重さんが来館。検診で上京の帰りとかで、修復なった船内に入り、また多くの子どもたちに囲まれ感慨深げ。故郷大分県津久見市に存住の高木さん、「身体に氣

あなたもわたしも花の精

新婦人から船にレリーフ



三月九日、新日本婦人の会東京都本部のお母さんたちが、いろとりどりのスイトビーの花束を手に手に第五福竜丸を訪れた。東京大空襲慰霊行動の一つであったがこの日はとくに、第五福竜丸修復記念の記念品の贈呈式が予定され、前日やっと修理完了の船を見あげて、口々に「よかった」のあいさつが交わされた。

「花の精」と題する精密なレリーフは

真鍮の彫金。岡部昭さんが心こめて作ったもので、新婦人のお母さんたちが一年余にわたって集めた平和の一円玉運動によって実った。妖精のような少女のほほえみが美しい。太陽にむかって花ひらく一人ひとりの心の希い核兵器のない地球をやさしいほほえみをあなたもわたしも花の精となつて広げよう。光をヒロシマ・ナガサキアピールを。新婦人本部中村会長から平和協会猿橋理事に手渡されたレリーフは、第五福竜丸を支えるコンクリートの台座にしっかりと固定された。

をつけ来春、家内とまたあいに来るよ」。三十二年、事件から初の対面である。

月末、和歌山県古座の寺地さんからの便り。同封の地元紙南潮新聞によると近く、町も協力して古座川中州に、第五福竜丸建造の地記念碑の建設運動がはじまる。

展示替で気分新らた

展示館の展示物も船出にふさわしく一新。休館日にまた閉館後と一週間がかりで展示計画にそい、パネルを吊し、解説板の釘を打ちと全面的に展示替が行なわれた。修復に最も苦勞し、スクリュウ

展示館開設十周年記念講演会の講演者決まる

六月九日(月)午後三時(予定)より神田・学士会館で開催される第五福竜丸展示館開設十周年記念講演会の講演者に、このたび、小川岩雄(立教大学教授・平和協会評議員)、関屋綾子(日本YWCA前会長・平和協会評議員)の二氏が決まった(近日中に案内状郵送)。

も新らたに「本物」が取り付けられ、雄大で木造船独得の迫力が実感できる船尾近くを入口に変更。まづ何より船をとすぐ階段を上り船を見つめ、そのわきに大漁旗、船員の衣服と工夫をこらした。床も平らになり、展示ケースは船側にすっきりならび、死の灰から放射能調査報告書まで貴重な資料も公開された。

また事務所も館内に移動、従来の階段下から入口付近に展示板で囲を作り天井もはって少しは部屋らしい雰囲気。しかし机を二つ置くと応接のソファも二つしか入らずあとはパイプ椅子の状況で、次は事務所・資料室へ意欲をわきたたせるしくみ。



写真・文 島田 興生

< 4 >

マーシャル諸島の中で、マジュロ島と並んで人が多く集まっているのは、クウェゼリン環礁である。クウェゼリンはアメリカの信純統治下にあるマーシャル、いやミク

ロシアの真の姿を見せてくれる格好の場所である。そこでは、アメリカがミクロネシアに何を求め、どんな形で維持し、現地の人びとと接してゆくのが白日のもとにさらされている。

一月二十九日から一週間、クウェゼリンに行ってきた。環礁内の最大の島クウェゼリン本島は島ごと米軍の基地として接収され、本土や沖縄基地でお馴染みの鉄条網は、ここでは海がその役割を果している。クウェゼリン本島の本来の地主であるマーシャル人は、現在で

イバイの波止場に、クウェゼリン基地を往復するフェリーが着いた。仕事に行く男や女たちは黙々と乗りこむ、帰ってきた者に、手に水タンクをさげているのが目につく。

は一介の駐留軍労働者としてこの島に通い、基地内の宿泊・滞在は勿論、デパートでの買物、レストランでの食事も許されず、仕事が終ると、ビキニ・エニウエトクの核実験時代に建設された労働者キャンプの島イバイ島に帰ってゆく。そのイバイ島に行くために、クウェゼリン軍用空港を民間機から降りた私たちは、この基地をただ通過することだけを認められていて、空港待合室からイバイ行きフェリーの出る波止場まで一直線に軍のバスで送られる。広々と舗装された道路、手入れの行き届いた街路樹や芝生、テニスコート、野球場、海に面したブルツキのスパックバーなどが、象のオリと呼ばれる巨大なレーダー施設やパラポラアンテナ群と交互にバスの窓から眼に入ってくる。

しかし、力となげなしの金で、マーシャル人の土地を占拠しつづける米軍の不法も、この「アメリカの町」がもつ計画性や清潔感の方が、へんな魅力になって感じるから不思議である。それは、これから訪れようとするイバイの町とあまりにも対照的であるからだ。イバイには、ローカル政府の運

営する小さなホテルが一軒あるが、私はイバイでは大低知人のNさん宅に泊めてもらう。Nさん「宅」と言っても、彼の一家はどこかの家に間借りをしていて、それも始終家が変わるのだが、現在の家には、他に三家族が一緒に、それぞれ四帖半か六帖位の部屋に一家四五人が暮らしている。

イバイでは、一軒に平均二〇人は同居していると言われる。端から端まで歩いて十五分。約〇・三平方キロの小さい埋立地のような緑の少ない島に約八〇〇〇〇人の人間が住んでいて、「世界一」の人口密度とも言われている。クウェゼリン基地で仕事を探したり、基地で働く親戚を頼ったりして、多くの離島から人が集ってくる。働いているのは、その「大家族」の中で一人か二人の男で、残りはおもて食べるためにだけ生きている、という感じで生活の余裕のないもの。イバイの町を歩いてみてもどこにも感じられないのである。Nさんは、毎週金曜日が給料日だが、その翌日には「もうボクは金はないよ」と言った。金がなければ食べられないこの町で一体どうするのだろうか(この項続)。

